

天文活動96年 ～山口県立山口博物館の天文活動の歩み～

松 尾 厚・岩 村 和 政

Astronomical Education Activities at the Yamaguchi Museum for 96 years

Atsushi MATSUO and Kazumasa IWAMURA

山口県立山口博物館研究報告

第46号(2020年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.46(March 2020)

天文活動96年 ～山口県立山口博物館の天文活動の歩み～

松尾 厚¹⁾・岩村 和政¹⁾

Astronomical Education Activities at the Yamaguchi Museum for 96 years

Atsushi MATSUO¹⁾ AND KAZUMASA IWAMURA¹⁾

Abstract

Yamaguchi Museum was founded in 1912 and is the oldest prefectural museum in Japan. Yamaguchi Museum seems to have started astronomical education activities in the 1920s. In this report, we introduce the history of 96 years of astronomical education activities at the Yamaguchi Museum.

1 はじめに

山口県立山口博物館（以下、山口博物館または当館）は、前身の防長教育博物館の開館（1912年（明治45年））以来108年にわたり、都道府県立博物館としては最も長く活動を行っている博物館である（動物園等を除く）。開館5年後の1917年（大正6年）には山口県に移管され、第二次大戦直後まで「山口県立教育博物館」として活動が続けた（図1）。現在は山口県教育委員会直営の博物館として、天文、地学、植物、動物、考古、歴史、理工の各分野で活動が続けている。開館から100年の歴史については100周年記念誌（図2）[1]で概観している



図1 山口県に移管され、新築移転した山口県立教育博物館。1917年12月の開館式当日の写真である。中央の白い大きな建物が博物館本館で、左端のレンガ造りの建物は維新記念室。維新記念室は現存している。



図2 山口博物館100周年記念誌(左)と記念リーフレット(2012年発行)。

1) 山口県立山口博物館（天文）

1) Section of astronomy, Yamaguchi Museum

が、本稿ではこれまでの山口博物館における天文活動の歩みを記す。当館の天文活動は1932年（昭和7年）の恵藤一郎^{きよふじ いちろう}着任後に大きく進展しており、本稿では恵藤一郎についても紹介する。

2 天文活動の始まり

山口博物館が天文分野の活動をいつ始めたかは明確でない。1917年（大正6年）及び1922年（大正11年）の年報[2]の陳列品目録には、天文関係資料は見当たらない。1924年（大正13年）の年報には「月球運動説明器」なるものの購入が記載されており、「地球より見た月の満ち欠け、及び月食の理由を簡単に説明する装置」との説明がある。この頃には天文関係の展示が始まっていたものと思われ、本稿のタイトル「天文活動96年」は、この年を起年としている。

天体観望会などの教育普及活動については、1917年（大正6年）から残されている館務日誌（欠巻あり）[3]を点検したところ、最初の観望会の記録は1934年（昭和9年）9月21日の「月を観る会」であった。ただし1932年（昭和7年）には15cm反射望遠鏡を購入しているの²、遅くともこの頃には観望会などを始めていたものと思われる（1932年及び1933年の館務日誌は欠巻。また館務日誌には、全ての行事が記載されているとは限らない）。

1936年（昭和11年）には大規模な日食観望会（山口市での食分0.64、当日の参加者は400人以上）を開催し、新聞各紙で大きく報道された（図3）。

さらに1941年（昭和16年）9月には、博物館前庭にスライディングルーフの天体観測室を新築して、重錘駆動の10cm屈折赤道儀（五藤光学）を設置し



図3 山口県立教育博物館での日食観望会の準備の様子を伝える記事(写真は博物館の裏庭) [1936年(昭和11年)6月18日 大阪朝日新聞]。



図4 天体観測室完成時の記念撮影(1941年)。新しく据え付けた10cm屈折赤道儀をはじめ、いくつかの望遠鏡が写っている。後方は当時の山口県立教育博物館本館。右から2人目が恵藤一郎。



図5 アルデバラン食を撮影した乾板。乾板下部に「アルデバラン掩蔽 昭和17.11.23. 23h37m」との書き込みがある。

(図4)、早速、同年9月21日の日食観望会(山口市での食分0.7)に利用した。その年には引き続き「仲秋の名月を観る会」「土星を観る会」などを開催している。山口博物館には天体を撮影した当時の写真乾板も残っている(図5)。この観測室は現代から見れば小規模な施設であるが、当時としては全国に希少な公開天文台である。公開天文台の開設としては、倉敷天文台(1926年)、国立科学博物館(1931年)に次ぐものになるのだろうか[4]。また、翌1942年(昭和17年)には、当館が東亜天文協会(現在の東亜天文学会)の会員になっている。

3 恵藤一郎のこと

前述のように山口博物館の天文活動が盛んになったのは、1932年(昭和7年)からのようである。ちょうどこの年の4月に恵藤一郎が山口博物館主事(副館長相当職)として着任した(図4、6、7)。恵藤は当館着任前から天文には相当な興味を持ち、造詣も深く、当館の天文活動の開拓者になった。恵藤は1926年(大正15年)頃から東亜天文協会(初期の名称は「天文同好会」)の役員(山口県理事)を務め[5~7]、機関誌「天界」にも寄稿している[8]。天文教育関係の著作もあり、天体望遠鏡の研究[9]などは相当に詳しい内容である。



図6 恵藤一郎(左端)と天体観測室。右側の学生は山口県立山口中学校(旧制)の日食観測隊一行(1941年9月)。

恵藤は全国的には鍾乳洞などの洞窟の調査で著名で、山口博物館退職後は新設された秋芳町立秋吉台科学博物館(現在は美祢市立)の初代館長に就任している。

もっとも、当館においては活動の中心は天文にあったようで、山口博物館には洞窟関係の調査記録は残されていない(当館在職中は国宝、史跡名勝天然記念物等の文化財の調査保存に力を尽くしたとのこと[10][11])。なお、当館退職後には秋吉台・秋芳洞の保全活動に活躍し、大きな功績を残している[12][13]。以下に恵藤氏の略歴を掲げる[10~16]。

- | | |
|-----------------|--|
| 1894年(明治27年) 7月 | 山口県美祢郡秋吉村(現在の美祢市)に生まれる |
| 1914年(大正3年) 3月 | 山口県師範学校卒業、その後主に秋吉台周辺の小学校に訓導として勤務(19歳) |
| 1925年(大正14年) 6月 | 良城尋常高等小学校(現在の山口市立良城小学校)校長(30歳) |
| 1930年(昭和5年) 12月 | 良城小学校辞任(その後山口県教育会書記へ[14])(36歳) |
| 1932年(昭和7年) 4月 | 山口県立教育博物館主事として着任(37歳) |
| 1945年(昭和20年) 6月 | 山口県立教育博物館の疎開事務を終えるとともに職を辞す(50歳)、その後村会議員、秋芳町(秋吉村等の合併により誕生、現在は美祢市)の各種役職を勤めるなど郷里で活躍 |
| 1959年(昭和34年) 4月 | 秋芳町立秋吉台科学博物館初代館長に就任(64歳) |

1959年（昭和34年）11月 秋吉台の学術研究に尽くした功績により山口県選奨（文化功労者）を受ける*（65歳）

*[10][11]等には山口県文化功労賞受賞とあるが、筆者が山口県教育委員会に確認したところ、文化功労賞とは別の「山口県選奨（文化功労者）」を受けていることが判明した[12]。

1959年（昭和34年）12月 病のため逝去（65歳）

山口県選奨の他、表彰多数。秋吉台・秋芳洞に関係する化石・動物などの学名に恵藤の名前が付されたものがいくつもある[13]。また山口博物館主事の職責を考えると、当館の収蔵資料の疎開指揮など、戦時中は相当の苦労があったものと思われる。なお、恵藤一郎の関連資料は秋吉台科学博物館に保管されており、筆者も調査に訪れた。



図7 晩年の恵藤一郎（撮影年不詳）。

4 第二次大戦後の天文活動

終戦直後は、疎開させていた収蔵資料の引き揚げ、軍事関係資料の整理など混乱が続いたが、

1950年（昭和25年）頃には徐々に体制が整ってきたようである[1]。1957年（昭和32年）の博物館要覧[17]には、当館の事業の一つとして「天体望遠鏡、星座投影器、スライド等による天文講座の開設」が掲げられ、星座と銀河の図や三球儀などの展示写真が掲載されている（図8）。1958年（昭和33年）4月の薩南諸島での金環日食に際しては、日食観望会を開催した（図9、10）。

この頃の山口博物館の活動の様子を、2003



図8 1956年(昭和31年)頃の天文展示の様子[17]。



図9 1958年4月19日の日食観望会。10cm屈折望遠鏡を使って、大きな白紙に日食の様子を映し出している。右側には当時の天体観測室が写っている。



図10 山口博物館で撮影した1958年4月19日の日食。山口市での最大食分は0.86。

年に松尾が当時の職員であった中村浩二氏から聞き取っているのので、以下に紹介する。中村氏は1952年度（昭和27年度）から1957年度（昭和32年度）まで、山口博物館に天文担当学芸員として在職していた。

「私（中村）が在職した頃は、終戦間もない頃で博物館も荒れており、お金も展示する資料も無く、中国電力などから寄付を仰いで、とにかく展示するものを揃えるのが仕事であった。普及行事もほとんどできなかった。私が着任する前は、天体観測室の10cm屈折望遠鏡もほとんど使われていなかったと思う。」「巡回観望会は私が着任する頃にはすでに始めていたが、天文同好会等との共催はなく、私と別の職員1人くらいで回っていた。旅費は受け入れ先に持ってもらい、望遠鏡は現地の学校などで揃えてもらう形で、鉄道、バスを乗り継いで行った。夏休みは、ほぼそれにかかりきりだった。」「当時は自然・理工系の担当者が2人くらい、人文系の担当者が2人くらいで、私は天文、地学、理工の担当を兼ねていた。植物、動物など他の分野の普及活動をする余裕はなく、他の分野の普及活動は全くされていなかったと思う。」

1963年（昭和38年）には直径4m近くの大きな十球儀（モーター駆動で9つの惑星が太陽の周りを公転する）を購入し、天文のメイン展示となった。この頃に館内に独立した天文展示室が設けられたようである（1957年の博物館要覧[17]には天文展示室の記述が無い）（図11）。1964年（昭和39年）には老朽化した山口博物館の整備改築計画が予算化され、1966年（昭和41年）1月から本館の解体工事が始まった[1]（図12）。なお、本稿では1917年（大正6年）建築の博物館本館を旧館、1967年（昭和42年）に完成した本館（現存の建物）を新館と呼ぶことにする。

1966年（昭和41年）3月末日には新館の起工式が行われ、旧館跡地に新館の建築が始まっ

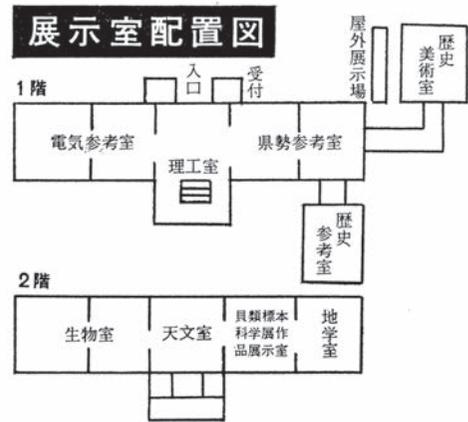


図11 旧館末期の展示室配置図(1965年頃の山口博物館の案内リーフレットから[18])。2階中央に天文展示室がある。



図12 新館建築のため取り壊し直前の天体観測室(1966年1～2月頃)。後方の本館からも資料や什器の搬出が始まっている。



図13 建築中の山口博物館新館(1967年頃)。屋上に工事中の天体ドームが見える。



図14 屋上に建築中の5m天体ドーム(1967年頃)。手前の人物は当時の天文担当者の本国丸。



図15 赤道儀据付前のドーム内(1967年頃)。赤道儀据付のための測量と思われる。



図16 20cm屈折望遠鏡の鏡筒の搬入(1967年頃)。建物北側からクレーンで屋上へ吊り上げられた。



図17 20cm屈折赤道儀架台の搬入(1967年頃)。屋上からは天体ドームのスリットを通して搬入された。

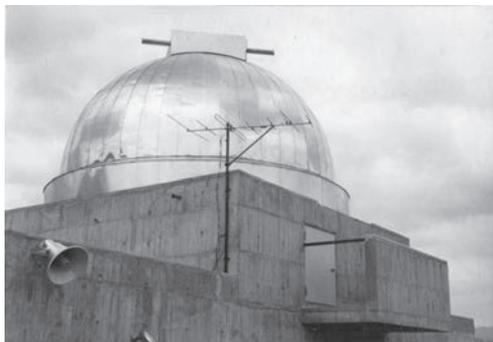


図18 竣工した天体観測室(1967年)。

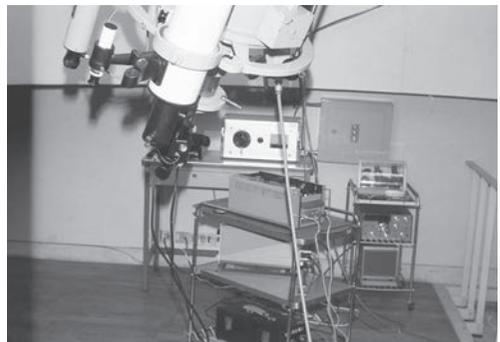


図19 20cm屈折赤道儀に取り付けられた光電測光装置(1970年代に撮影)。

た[1] (図13)。新館屋上には直径5mの天体ドーム(アストロ光学)が建設され、20cm屈折赤道儀(日本光学)が据え付けられた(12.5cmアストロカメラ同架、光電測光装置を別途購入)。当時としては立派な公開天文台施設である(図14~20)。また、新館入口ピロティには大きなフーコー振子が設置され、博物館のシンボルとなった(図21)。

1967年(昭和42年)10月1日に新館がオープンし、天文展示室(改築開館直後は宇宙開発・天文展示室)も広がった(図22~24)。改築工事の前年(1965年8月)から専任の天文担



図20 ドーム内の20cm屈折赤道儀(現状)。12.5cmアストロカメラは取り外している。



図21 新館建築時に入口ピロティに設置されたフーコー振子(1967年頃)。吹き抜けの高い2階天井から吊るされていたが、1987年に松尾が着任した時には、すでに撤去されていた。



図22 開館目の山口博物館新館。新築当時の外壁はコンクリート打ち放しであった(1967年)。



図23 1993年の山口博物館前景。1990年から1992年にかけて外壁をタイル貼りとした。現状とほぼ同じ外観である。



図24 天文展示室(1974年撮影)。当初天文展示室は本館3階にあり、この頃は宇宙開発関係の展示も一部残っていた。手前は1963年に購入した十球儀。



図25 山口県天文協会と共催で開催していた「夏季天文講座(第4回)」(1977年、宇部市小野)。会場は小野小学校で公民館を宿舍とする2泊3日の日程だった。

当者が一人配置されており（それまでは地学等と兼務）、新館オープン後は20cm屈折望遠鏡による観望会や、県内各地の野外活動施設を利用した「夏休み天文講座」など、さまざまな教育活動に取り組んだ（図25、26）。1961年（昭和36年）の山口県天文研究会（山口天文同好会の後身）設立時からその事務局を引き受けるなど[19]、地域の天文関係団体・天文ファンとの連携にも努めた（山口県天文研究会の発展的解消後は、1980年代半ばまで後身の山口県天文協会の事務局が置かれた）。



図26 天体観測室の20cm屈折望遠鏡を使っでの天体観測会(1974年)。

5 平成時代の天文活動

筆者（松尾）は1987年（昭和62年）4月に山口博物館に着任し、現在に至るまで、主に天文担当学芸員として32年余を勤めているが、その間、特に次のような点に心がけて活動に取り組んできた。

- ① 山口博物館に天文分野があることを広く知ってもらい、利用してもらおう。このため広報効果のあるタイムリーな観望会を企画する（日食、月食については、ほぼ毎回観望会を実施し、そのほかに水星・金星の太陽面通過、火星大接近、彗星、しし座流星群などの観望会を開催した）（図27～29）。観望会に限らず天文現象についての情報発信など、様々な機会をとら



図27 日食を見る会(1987年、本館屋上)。



図28 皆既月食を見る会(2000年、本館屋上)。



図29 月と土星の大接近を見る会(2002年、本館屋上)。

えて、マスコミ等での広報に努める。

- ② 現代の天文学は物理学をその基礎学問とし、数学の知識も多用するが、博物館における天文の教育・普及においては、天文教育に関する一般的な考えのとおり、自然史としての天文学を重視し、宇宙の姿・構成とその進化を感じてもらえるものとする。
- ③ 観望会は展示室に入り得ない「本物の天体・宇宙」の「博物館における実物展示」

の一つとして、特に重点的に取り組む(図30、31)。観望会を良好な環境で実施できるように、山口博物館周辺の光環境保全にも取り組む[20]。



図30 土星を見る会(1991年、天体観測室)。



図31 オリオン星雲を見る会(1999年、本館屋上)。

- ④ 観望会の実施回数を増やすだけでなく、貴重な天文現象については多くの人々に見てもらえるように安全面に配慮しつつ、できるだけ大規模な観望会を開催する(図32、33)。山口博物館の天文担当者は一人なので、ボランティアを募り、それを組織化して大きな観望会を安全に開催できる体制を整える。



図32 日食を見る会(1997年、本館屋上)。



図33 山口県陸上競技場と共催で開催した日食観望会(2009年、2,000人以上が参加)。

- ⑤ 観望会の参加者へは、星好きの仲間を迎えるような気持ちで接し、コミュニケーションを図る。また、県民に頼られる博物館として「レファレンス活動」を大切にする。
- ⑥ さまざまな機会を設けて一人でも多くの人々に天文・宇宙・自然に触れてもらい、星空の美しさ、宇宙の広がり、宇宙の時間の長さを感じてもらおう。年少者向けにも天文・宇宙に親しみ、自然について考えるプログラムを企画するとともに、一般県民向けに最新の天文学を紹介する機会も設ける(図34～39)。展示室作りもこの観点で考える(図40、41)。
- ⑦ 天文ファンの繋がりを作る。山口県内の天文ファンのメーリングリストや、天文ファンが集う機会を設け、ボランティア等の学習機会も設ける(図42～44)。
- ⑧ 県立博物館として、山口県にかかわる天文関連の仕事に取り組む。例えば、山口県の天文学史、山口県の星の方言、山口県落下隕石などを調査テーマの一つとし、山口県文化の発展に寄与するよう努める。また、それらの調査成果を展示に取り入れるとともに、観望会などの教育普及活動や博物館からの情報発信の題材として活用する(図45)。



図34 小学生～中学生を対象に(保護者を含む)1泊2日で開催した「夏季天文講座」(1988年)。会場は山口県秋吉台少年自然の家。



図35 幼児から小学生下学年向けの星空教室「あの星なあに？」(2010年、別館講座室)。講師は幼稚園教諭の園部みゆき氏。明るいうちは室内で星についての話を、夕刻からは天体観望を実施した。



図36 小学生～中学生向けの自然教室「虹を作ろう」(2000年、別館講座室)。文部科学省委嘱事業「自然と遊ぼう」の一つとして実施。簡易分光器を製作し、光や色、スペクトル観測の原理について考える。



図37 一般向けの天文講演会「アストロトーク」(2005年、別館講座室)。講師は東京大学理学部長(当時)の岡村定矩教授。1989年から2009年まで、天文学の第一線の研究者等を招いて年2回程度実施した。



図38 太陽系の広がりを実感してもらおうと山口県児童センターと共催で開催した「太陽系ウォーキング」(2002年)。山口博物館近くの国道9号線(ほぼ直線路)を利用して、7億分の1の太陽系を海王星まで歩こうという企画。写真は7億分の1の太陽を背景にした出発式。



図39 「太陽系ウォーキング」では、各惑星の地点でボランティアがプラカードを掲げて7億分の1の惑星模型を持って待っている。ゴール(海王星)の山口県児童センターでは、センター所長から太陽系踏破証明書が授与された。

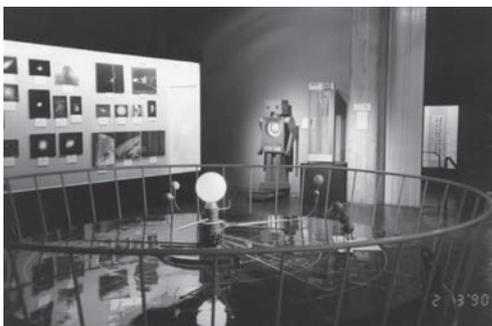


図40 1990年(平成2年)当時の天文展示室。この頃に天文展示室が3階から2階へ移った。当時は天体写真を用いての各種天体や宇宙の構成の解説と、隕石の展示が主な内容だった。



図41 2012年の展示更新後の天文展示室。中央は更新した直径4mの太陽系運行模型(九球儀)。各惑星の模型が1年を1分間として太陽の周りを回る。土星は環の傾きを一定方向に保ったまま公転する。



図42 天文談話会(2006年、当館)。山口県内の天文ファンや山口博物館の天文ボランティアが、持ち回りで天文に関する話題を提供する。1998年から月に1度開催し、現在でも「天文ワークショップ」として形を変えて継続している。



図43 天文小談話会(2007年、当館)。山口博物館の天文ボランティアを中心とした天文に関する勉強会(天文ゼミ)。2005年から2015年にかけて、週1回を目途に実施した。



図44 天文ボランティアグループが自発的に発行を始めた「ボランティア通信」。写真は第7号で発行1周年の記念号(2007年)。



図45 テーマ展「ふるさとの星もよう」(2004年)。山口県内の天文学史資料や隕石の落下記録などを展示した。

6 収蔵資料と調査研究活動

山口博物館には歴史部門があるため、江戸期からの天文学史資料も収蔵している。渋川春海の「天文分野之図」(図46)、毛利家伝来の「正午器」(図47)、その他、幕末期～明治期にかけての経緯儀、六分儀などの天体測量機器、天体望遠鏡、地上望遠鏡(遠目鏡)などがある。天文分野之図は、1994年(平成6年)に徳山毛利家の家臣の子孫から寄贈を受けたもので、他の資料も寄贈によるものが多い。

また、県内落下隕石の調査とその関連資料の収集に努めており、現存する隕石2種の実物(仁保隕石3号(図48)及び玖珂隕石の切片)とレプリカ(仁保隕石2号、玖珂隕石本体)を所蔵、展示している。その他に、日本天文学会、東亜天文学会の初期の会誌(天文月報、天界)なども収集しており、展示にも活用している(図49)。

調査研究活動については昭和20年代以前は明瞭でないが、昭和30年(1955年)以降は次のようなテーマで継続的・組織的な調査研究活動に取り組んでいる。

- ① 山口博物館所蔵の天文学史資料に関する調査[21]
- ② 山口県落下隕石に関する調査(主に落下時の状況や文化的記録)[22～25]

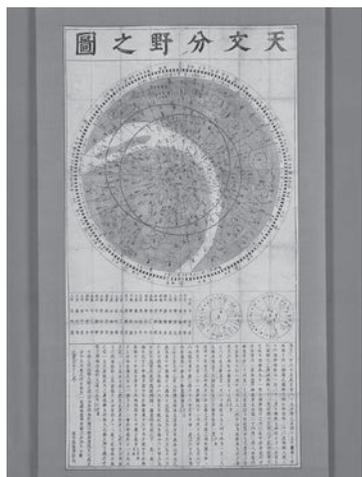


図46 渋川春海の「天文分野之図」(1677年)。

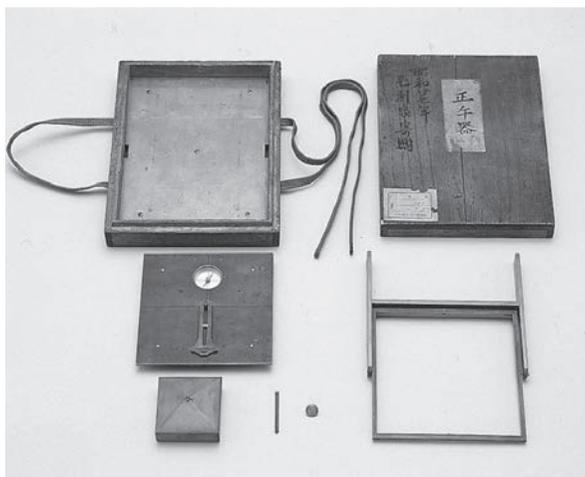


図47 正午器(正午を決めるためだけの精密な日時計)。



図48 仁保隕石3号(実物) 1897年(明治30年)に現在の山口市宮野に落下したものの。



図49 日本天文学会の会誌「天文月報」(創刊2年目(1909年)～、写真左)と東亜天文学会の会誌「天界」(創刊号(1920年)～、写真右)。

- ③ 光電測光装置による星のシンチレーションに関する研究[26、27]
- ④ 山口県の星の和名（方言）に関する調査[28][29]
- ⑤ 山口県の天文史跡に関する調査[30]
- ⑥ 山口県内の天文学史資料に関する調査[31]
- ⑦ 日食の安全な観察法に関する調査研究[32ほか多数]

7 特別展示

天文分野の展示資料は、写真や映像、天文学史的資料以外には借用可能なものが限られ、利用できる巡回展も少ないため大規模な特別展の企画は難しいが、さまざまな視点から天文に親しんでもらえるように機会をとらえて各種の展示に取り組んだ。図45、図50～55に掲げるもの



図50 「岩崎賀都彰スペースアート」展(1992年)。スペースアート(宇宙画)の第一人者であった岩崎賀都彰氏の作品を展示した。企画展「サイエンスやまぐち'92」の中で開催し、特別展示室一室(約150㎡)を利用した。



図51 写真家の八坂康麿氏の作品を展示した「星とオーロラ」展(1994年)。岩崎賀都彰スペースアート展と同様に、企画展「サイエンスやまぐち'94」の中で開催した。



図52 企画展「ゆめ探検館」(2001年)。この企画展の中で「すばる望遠鏡と宇宙への夢」として、日本が新しくハワイに建設した「すばる望遠鏡」の巡回展示を中心に、他の借用資料も加えて宇宙の観測や宇宙の広がりを紹介する展示を行った。当館で開催した天文分野の特別展としては、最も大規模なものの一つであった。



図53 館蔵の銀河の写真集などを展示したスポット展示「銀河のアトラス」(2005年)。スポット展示は館蔵資料を活用した小展示で、360cm幅のケース1台を使用する。



図54 日本星景写真協会の巡回展示「星の風景(星景写真展)」(2008年)。テーマ展として開催した。テーマ展は、特別展示室の一室(150㎡)だけを使用する展覧会。



図55 スポット展示「さあ日食だ！」(2009年)。山口県では半世紀ぶりとなる大規模日食(食分87%)とその観察方法を紹介した。この日食は、鹿児島県トカラ列島付近では皆既日食となっている。

のほか、テーマ展「鉱物・隕石」(1990年)、同「星の風景～第3夜」(2018年)、同「空の不思議な写真展」(2020年)、スポット展示「火星接近」(2005年)、同「星表と星図」(2006年)、同「新しい太陽系」(2007年)、同「天文雑誌の100年」(2008年)などを開催し、特別展「宇宙兄弟」(2018年)の中では山口県落下隕石の実物を借用し展示した[33]。

8 学校との連携

第二次大戦の終わりまでは「教育博物館」と名乗っていたように、展示を始めとして学校教育・青年教育・実業教育等に資する活動を行い、多くの学校団体の見学があった[1][3](図56)。

その後、特に学校との連携を強化したのは、2004年(平成16年)に「博物館学校連携事業」を始めてからである。この事業では、毎年2～4名の小・中学校教員が社会体験研修として山口博物館へ1年間派遣され、団体見学の対応や、学校からの要望に応じて出前授業、教材・教具の貸し出し、教員研修会の支援などを行っている。特に出前授業は離島を含む県内全域にわたり、年間約300回、延べ2万人以上の児童・生徒等を対象に実施している(図57)[34]。各種の出前授業の中では、天体教室(昼間の太陽観察、夜間の天体観測など)の要望も多く、これに応えるために持ち運び用の8cm屈折望遠鏡(経緯台)9台、小型太陽望遠鏡(PST)6



図56 山口市第一・第二尋常高等小学校の団体見学(1929年(昭和4年))[2]。



図57 小学校への出前授業(太陽望遠鏡による太陽観察、2013年頃)。

台を用意した。学校への出前授業などは主に山口博物館派遣の長期研修教員が当たり、学芸員はその支援を行っている（教員研修会は主に学芸員が担当）。

9 おわりに

山口博物館での天文分野の活動は時代の波はあったにせよ、第二次大戦による混乱期を除けば比較的平穏に継続されたように思う。これは県民の方々をはじめ関係者の支えと、その時々山口博物館職員の努力によるものと思うが、100年近くの間、様々な天文教育普及活動に取り組むことができたのは「博物館」という比較的認知された枠組みに支えられた面が大きいと考えている。戦前は「教育博物館」として多くの児童生徒の利用を得て、戦後も県教育委員会の管理運営のもと、また登録博物館ゆえに博物館法を根拠として、多様な活動に取り組むことができた。今後とも引き続き山口博物館及びその天文活動への支援をお願いしたい。

本稿をまとめるにあたり、恵藤一郎関連資料の調査については藏本隆博氏を始め多くの方々にお世話になった。また、数十年間分の館務日誌の精査には様々な方にご協力いただいた。厚くお礼を申し上げる。

おわりに恵藤一郎以降の天文担当者を記しておく（兼務を含む、*は故人）。なお、1960年以前の記録は一部不明確である。

恵藤一郎*（1932.4月-1945.6月）、中村浩二（1952.4月-1958.3月）、村岡豊*（1960.4月-1965.3月）、本国丸*（1965.8月-1971.3月）、久賀通生*（1971.4月-1982.3月）、中島彰（1982.4月-1986.3月）、木田茂孝*（1986.4月-1987.3月）、松尾厚（1987.4月-2011.3月）、藤屋昇（2011.4月-2013.3月）、山下朱美（2013.4月-2015.3月）、松尾厚（2015.4月-2020.3月）、岩村和政（2019.4月-）

引用文献

- [1]山口県立山口博物館、2012、山口博物館100年のあゆみ、山口県立山口博物館。
- [2]山口県立教育博物館、1917-1932、教育博物館年報（初期は「本館報告」など別タイトル）。
- [3]山口県立教育博物館、1917-1945（欠巻あり）、館務日誌。
- [4]日本天文学会百年史編集委員会（編）、2008、日本の天文学の百年、246、恒星社厚生閣。
- [5]天文同好会、1926、（本部・事務所・支部の一覧）、天界、No.68、奥付ページ。
- [6]中国防長新聞、1936、「見えた！黒い太陽」、6月20日号。
- [7]防長新聞、1936、「山口の日食観測記録」、6月21日号、3。
- [8]恵藤一郎、1932、「吊いの言葉（中村要氏追悼文）」、天界、No.140、505。
- [9]恵藤一郎、1927、「天体望遠鏡の研究」、山口県教育、No.318、19-31、山口県教育会。
- [10]秋吉台科学博物館ほか、1961、「故恵藤一郎先生をしのんで」、秋吉台科学博物館報告、No.1、58-64。
- [11]秋吉台科学博物館、1966、初代館長恵藤一郎氏略歴 - 胸像除幕記念 -。

- [12]山口県、1959、被選奨者事績概要（昭和34年11月23日）。
- [13]秋吉台科学博物館、1985、秋吉台・秋芳洞の人物史3「恵藤一郎 - 秋吉台をまもる -」、秋吉台科学博物館。
- [14]山口県教育会、1931、山口県学事関係職員録（昭和6年7月1日現在）、204。
- [15]恵藤一郎、履歴書（自筆）、美祿市立秋吉台科学博物館保管。
- [16]高橋文雄、1973、良城小学校百年史、248-263、良城小学校開校百年記念事業委員会。
- [17]山口県立山口博物館、1957、山口博物館要覧。
- [18]山口県立山口博物館、1960頃、山口博物館案内リーフレット。
- [19]山口県天文研究会、1961、銀河（山口県天文研究会誌）、No.1、奥付ページ。
- [20]松尾 厚、1992、「天体観望施設周辺の光環境保全について」、第6回天文教育研究会集録、188-189、天文教育普及研究会。
- [21]松尾 厚、2003、「山口博物館所蔵の天文学史関連資料Ⅰ」、山口県立山口博物館研究報告、No.29、63-72。
- [22]村岡 豊、1963、「山口県の隕石（Ⅰ）」、山口県の自然、No.10、22-25、山口県立山口博物館。
- [23]村岡 豊、1964、「山口県の隕石（Ⅱ）」、山口県の自然、No.11、13-15、山口県立山口博物館。
- [24]本 国丸、1966、「山口県の隕石について」、山口県の自然、No.16、26-28、山口県立山口博物館。
- [25]松尾 厚・岩村和政、2020、「山口県の隕石（Ⅳ）」、山口県立山口博物館研究報告、No.46、17-36。
- [26]久賀通生、1973、「星のシンチレーション（1）」、山口県立山口博物館研究報告、No.3、19-30。
- [27]久賀通生・真鍋大覚・佐藤洋子、1981、「星のシンチレーション（2）」、山口県立山口博物館研究報告、No.7、1-6。
- [28]中島 彰、1983年秋頃～1984年5月、「山口県の星の方言」（山口博物館天体観測会での配付資料）、山口県立山口博物館。
- [29]松尾 厚、2019、「山口県の星の和名～聞き取り調査の記録～」、山口県立山口博物館研究報告、No.45、1-14。
- [30]松尾 厚・松村 巧・西城恵一、2006、「日本の天文史跡目録」、山口県立山口博物館研究報告、No.32、35-59。
- [31]松尾 厚、2014、「地域における天文学史資料所在の悉皆調査」、日本天文学会2014年春季年会講演予稿集、76。
- [32]大西浩次・松尾 厚ほか、2014、「太陽観察グラスの透過率測定Ⅰ・Ⅱ」、長野工業高等専門学校紀要、No.48。
- [33]杉江喜寿・漁剛志・松尾厚、2019、「2018年度特別展『夢・未来・そして宇宙へ！宇宙兄弟展2018×やまぐちと宇宙』の概要報告」、山口県立山口博物館研究報告、No.45、21-37。
- [34]小野雅弘・片山博登・弘永真理子、2018、平成29年度博物館学校地域連携教育支援事業長期研修報告書、山口県立山口博物館。